

てっぽうでんらい
鉄砲伝来

天文12年（1543年）8月26日、鹿児島県の種子島に一艘の船が漂着しました。その船には鉄砲を持ったポルトガル人が乗っていました。彼らから鉄砲を買い入れた領主の種子島時堯は、鍛冶屋の八板金兵衛に同じものをつくらせました。その後、優れた鍛冶師のいる堺や近江の国友でも鉄砲はつくられるようになりました。そして、またたく間に日本各地にひろまり、戦国大名はこぞって鉄砲を買い入れました。

ひなわじゅう れきし
火縄銃の歴史

火縄銃（鉄砲）はこれまでの戦いの方法を一変させました。騎馬武者中心の戦いから、組織的な集団戦に変わりました。そして、鎧・兜や城の形態も変わりました。この火縄銃をもっとも有効に活用したのが織田信長でした。

信長は天正3年（1575年）、長篠の戦いで、大量の火縄銃を使い、大勝利をおさめました。この長篠の戦いで、信長はまず、馬をふせぐ馬防柵をめぐらし、甲斐（山梨県）の武田勝頼の騎馬隊の突入を防ぎました。そして、鉄砲隊は順に発射し、騎馬隊をやぶりました。

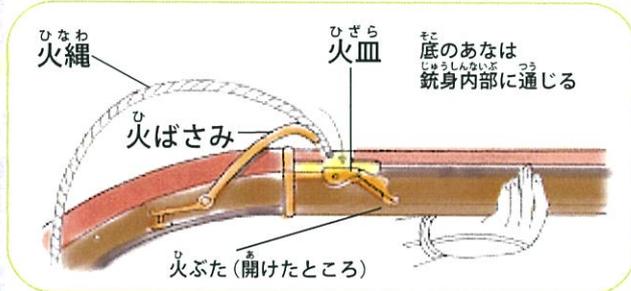
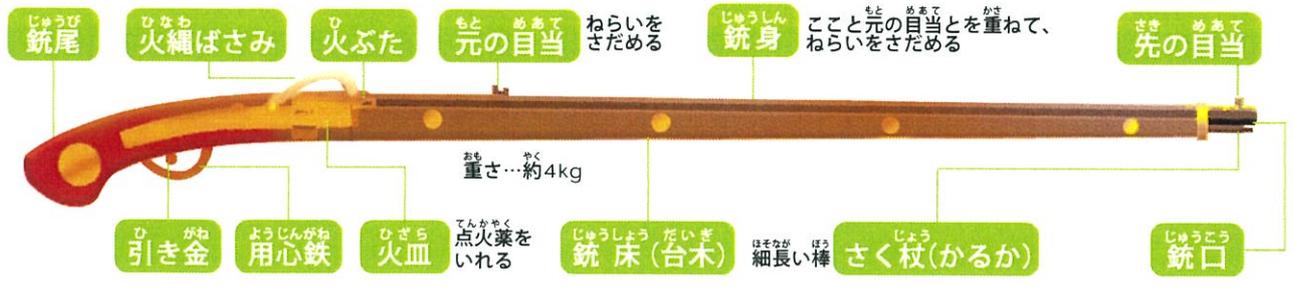
ながしのかっせんすびょうぶ
〈長篠合戦図屏風〉

えどじだい こむ
江戸時代のことがわかる子ども向けホームページ
「よしなおくん」もみてね。



2 ひなわじゅう ぶぶんめいしやう 火縄銃の部分名称

かやく せき もくたん わりあい つく
 火薬はしょう石10、イオウ1、木炭2くらいの割合で作
 られました。しょう石はほとんど中国からの輸入でした。
 てっぽう たま なまり まる たま ひなわ あざ
 鉄砲の玉は、鉛の丸い玉がほとんどでした。火縄は麻や
 もめん たけ つか
 木綿、竹などが使われました。

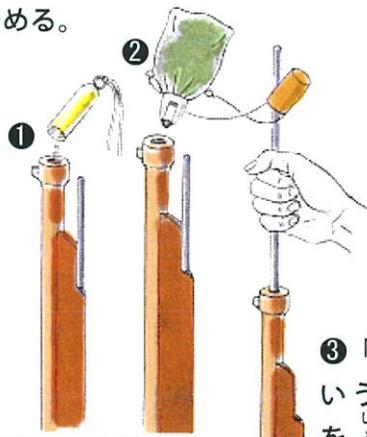


ひなわじゅう じゅうしんやく
 火縄銃は銃身約1メー
 ル、重さ約4キロで、直径約
 1センチの鉛の玉を使うもの
 が多い。有効射程距離は約
 100メートル。



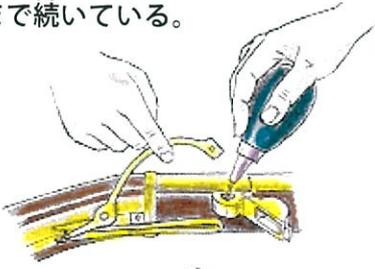
3 ひなわじゅう う かた 火縄銃の打ち方

① じゅうこう から 火薬(推進薬) を つめる。



② じゅうこう から 弾丸(鉛) を つめる。火薬と弾丸が セットになっている 早合を使うと、①と② が同時にできる。

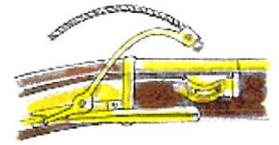
④ ひぶたをひらき、火皿に点火薬(口薬) をもる。火皿にはあなが開いていて、銃身の中まで続いている。



③ 「さく杖」という細長い棒を、銃口からさしこみ、火薬をおさえこむ。



⑤ ひぶたをとじて、火ばさみをおこし、火のついた火縄のはしをささむ。



⑥ 打つ前に火ぶたをあけて、引き金を引くと、火ばさみが落ち、火縄の火が点火薬(口薬)に点火する。この火はさらに、銃身の中の火薬に点火、爆発し、その勢いで弾丸を発射させる。